

子育て支援教室を母親はどのように評価しているか

巖岡 幸一*・亀島 信也**

Outcome study on the effect of a parenting program

Koichi Warabioka and Shinya Kameshima

要約：多くの子育て支援プログラムが展開されている中、組織的な効果の検討が十分になされてきていない。本研究は、今後の、対象者に望ましいプログラム開発にとって必要な基礎データを提示することを目的として取り組まれた。具体的には、プログラムに参加した母親から、母子行動や夫婦関係などに影響することが報告された。同時にプログラムに参加した要支援児の母親は、普通児の母親と異なり、専門的知識をプログラムに期待していることが明らかにされた。

Abstract： Although the number of parenting programs is on the rise, systematic report of their effects is scarce. The objective of the present study is to provide the information from a pilot project of a parenting program. The mothers who participated in the program reported the changes in the mother-child interaction and their relationship with their spouse. The mothers of potentially abused children had significantly higher expectation from the program in obtaining professional advice compared to the mothers of healthy children.

Key words： 子育て支援教室 parenting program 自己評価 self-evaluation 効果測定 measurement of effectiveness

1 問題と目的

近年、子育て支援が社会施策の中心となり、各地域で様々な支援事業が展開されてきている。我が国では1980年代初頭から、育児不安や育児ノイローゼをテーマに調査研究が進められてきており、育児不安を低めることを目的とした子育て支援の必要性が強調されてきている。例えば、牧野（1983）は数年にわたる調査研究から、近隣や地域活動など広い人間関係を持つことが、子育て不安を低めることと関連しており、子育てのみに全力を尽くしている母親

に、子育て不安が蓄積されるということを見いだした。そして、この支援を必要とする親たち自身が広い社会関係を持ち、時々、子育て以外の活動をする余裕を持つことこそが、「良い子育て」のために必要であると論じていた。

都留（1990）の報告からも、核家族化の進展や地域共同体の崩壊等により、上述の育児不安や育児ノイローゼといった状況が広がり、また、幾世代にもわたって培われてきた子育ての知識や技能が継承されにくい状況が生まれていることがわかる。本来、子育て支援活動や支援事業は、落合（1980）によると、直接的に「子育てそのものの一部や全部を代行すること」の他に、次にあげる要因を含んでいる。(1) 経済的子育て支援、(2) 情動的子育て支援、(3) 情

*関西福祉科学大学大学院社会福祉学研究科
心理臨床学専攻 学生

**関西福祉科学大学社会福祉学部 教授

緒的子育て支援、の3つの要因であり、(1)のような金銭的な経済給付と(2)と(3)のその他のサービス提供である。

これらを部分的もしくは包括的に含めた事業は、数多く存在するが、例えば、1990年度からはじまった厚生省(現厚生労働省)の推進事業のひとつである「一時的保育」、「育児リフレッシュ支援事業」(1992年)、「保育所地域子育てモデル事業」(1993年)、「今後の子育て支援のための施策の基本的方向について(エンゼルプラン)」、すなわち「緊急保育対策等5か年事業」(1994~1999年度)、「重点的に推進すべき少子化対策の具体的実施計画について(新エンゼルプラン)」(2000~2004年度)などの事業で子育て支援活動が展開されてきている。

一方、上記のような子育て支援事業が多く展開されている中、利用者にとってより効果的なプログラムの開発や、多職種からなる援助者の連携の強化をはかる施策などの動きもみられ、この動きに応じて、子育て支援を取り巻く環境や支援効果そのものを検討する研究も行われている。直近の研究例としては、地域の子育て支援サービスがどの程度認知され、それが利用度にどの程度関連しているかを調査した研究(宮本, 2005)や、子育て支援プログラムの利用前後において母親の心理的变化を測定した研究(尾崎, 2004)などがある。

しかしながら、上記のような調査研究は行われてはいるものの、現状報告程度にとどまっており、子育て支援プログラムの効果測定や支援サービス方針立脚に向けての提言などを組織的に検討している研究は見受けられない。例えば、上記にあげた宮本(2005)の研究では、公的子育て支援サービスの認知度に関する研究であり、それらの利用促進を目的に調査が進められているが、効果的な支援サービスの検討は見受けられない。同様に尾崎(2004)の研究でも、プログラムの開始時と終了時に参加者の母親意識と育児不安を調査し、育児不安がある程度低減したという結果を提示しているものの、

心理的变化と具体的なプログラムとの関連までは検討がなされていない。

このように子育て支援プログラムに関する研究は、その手法や着眼点により、いまだ記述的な研究結果を提示する程度にとどまり、利用者である母子とプログラム自体に関する効果測定を行った、具体的かつ実証的な研究はほとんど見受けられない。

この子育て支援の効果を知るためには、(1)その対象児・者の特性を把握し、(2)支援プログラムの内容をおさえ、(3)支援後の変化を捉えること、この3点が少なくとも必要であると考えられる。(亀島・谷向・藤岡・牛尾・沼田, 2005年 印刷中)。(1)については、乳幼児期の子どもの急速な発達の変化に伴い、養育者の不安やストレスの軽減に効果のある支援が異なってくると考えられる。手島(2001)の質問紙による養育者の育児ストレスと育児支援システムの調査報告によると、母親の育児不安に対して4ヶ月児の場合には夫からの精神的サポートが、1歳6ヶ月児では育児代替の共助的サポートが重要な役割を果たすことを示している。このように、子どもの年齢要因によっても必要とされる支援は異なってくる。(2)については、対象児・者の特性に合わせたプログラムを検討するために、また系統的に支援効果を評価するうえで必要となる。(3)については、有効な子育て支援を見極めるために、また支援の向上を考えるうえでも性急になされるべき研究課題であるといえよう。

しかし、前述したように子育て支援の効果を検討した研究は数少ない。これまでの支援の効果を検討した研究には、子育てグループの中の虐待の目立つ母親とその子ども(支援開始時1歳7ヶ月)という1ケースを対象にし、遊び場面での観察・半構造化面接・個別教育相談を行い、その中で見られた変化を報告した研究(岩立ら, 2002)や幼稚園の3~5歳の養育者を対象とした子育て支援プログラムを実施し、その効果を質問紙法と担任教諭との連絡帳によって

養育者の育児意識・態度の変化などを見出した研究（小谷ら，2005）がある。しかし、これらの研究は個別ケースの検討であって支援対象者の全体の変化を捉えたものではなかったり、質問紙の調査による心理的効果の検討のみであったりと、具体的に養育者の行動が変化したかどうかの検討はなされていない。

ところで1/0サンプリングという手法で、育児支援教室に訪れる母親と子どもの行動分析をした亀島（亀島・谷向・炭岡・牛尾・沼田，2005年印刷中）らの研究では、プログラム参加開始時と終結時の子どもと母親の行動を比較検討された。そして、子どもへの身体接触、子どもへの言葉かけ、子どもへの視線、および、母親の行動やにこやか度が有意に変化したことが報告された。そこで今回の研究では、並行して得られた母親へ質問紙データを用いて、参加した子育て支援プログラムをとおして、母親自身の変化の様子が組織的に検討される。

また、子育て支援プログラムの効果測定を行う際には、そのプログラムの事前・事後による変化を比較するというだけでなく、親子関係において問題がないと思われる子ども（本論文では「普通児」とする）と母親との交流と、支援が必要であるとされる子ども（以下、「要支援児」とする）と母親との交流の違いも比較することが必要と思われる。この違いが明らかにされることによって、定期健診などで要支援児の母親の早期発見につながり、効果的な支援プログラムの立案に役立つであろう。

よって目的は以下のように整理される。

〈目的1〉母親による子育て支援教室参加後のプログラム評価

〈目的2〉普通児と要支援児の母親によるプログラム評価の差

・子育て支援教室参加によって、どのような点に変化がみられたか。それは普通児の母親と要支援児の母親で異なる傾向が見られるのか。（6件法調査の目的）

・参加によって引き起こされた変化の要因は何か（4件法調査の目的）

このように本研究は、教室内での子育て支援プログラムの効果を検討し、今後の子育て支援の「効果的な介入プログラム」作成のための基礎データを呈示することを目的とする。

II 方法

1. 対象と調査手続き

本研究の対象者は、大阪府近郊に在住で、K市の子育て支援教室に参加した母親であった。これらの対象者は、K市「市報」によって募集され、今回の研究協力に同意した者で、K市の1歳6ヶ月定期健診によって「要支援児」とされた子どもの母親（コアラ教室）と、そうでない子ども（以下、普通児とする）の母親（こぐま教室）、に分けられた。要支援の内容は、子どもの発達面での要観察ケースのほか、大半は育児困難や不安を訴える母親のケースである。

調査用紙は教室最終回に返信封筒をつけ配布し、郵送による回収が行われた。質問紙の全配布数は101、回収数は63（回収率62.4%）であった。各教室の回収数（Table 1）は、コアラ教室38、こぐま教室25であった。これは子育て支援教室が3ヶ月周期（クール）で開催されており、そのうち一つのクールにおいて「コアラ教室」のみ調査可能であったことによる。

なお子どもの平均年齢は、コアラ教室の子ども1.83歳、こぐま教室の子ども1.76歳であった。

Table 1 質問紙調査回収数（単位：人）

	コアラ教室	こぐま教室	合計
第1クール	12	—	12
第2クール	15	14	29
第3クール	11	11	22
合計	38	25	63

2. 質問項目

質問項目は、教室参加による子どもの行動や発達に関する変化、声かけの量や関わり方など母子の関係性、母親の親としての自己概念や不安、父子・夫婦関係などについての自己査定(6件法)、変化の要因(4件法)、参加に関する感想(自由記述)、子育てサポートの有無、今後の支援ニーズなどから構成されている。

本研究では上記質問項目のうち、(1) 子育て支援教室参加後の子どもと家族の変化に関する項目、(2) 子育て支援教室参加による変化の要因に関する項目、について検討を行った。

質問項目(1)は21項目からなり(Table 2)、それぞれ「-2:参加前より非常に減った」「-1:少し減った」、「0:教室参加前と変わらない」、「1:やや増えた」、「2:参加前より非常に増えた」、「3:これまでと比べものにならないくらい増えた」の6件法で回答が求められた。これら6件法の回答を、概要把握のために『減った』『影響なし』『増えた』の3件法に再集計された。

質問項目(2)は10項目からなり(Table 3)、それぞれ「0:影響なし」、「1:ほんの少し影響があった」、「2:影響があった」、「3:非常に影響があった」の4件法で回答が求められた。これら4件法の回答を、概要把握のために『影響なし』『影響があった』の2件法に再集計された。

3. 分析方法

質問項目(1)・(2)ともに、子育て支援教室全体の傾向と、コアラ教室(要支援児グループ)・こぐま教室(普通児グループ)別の傾向の2点に分けられ、分析が行われた。

なお統計解析には、SPSS 12.02 J for Windows (SPSS社)が用いられた。

Table 2 教室参加後の子どもと家族の変化 質問項目

	項目
1	子どもがおかあさんに話しかけるおしゃべりの量
2	教室で、子どもがおかあさんから離れている時間
3	お友達に近づいたり、話しかけたり、関わっていきこうとする回数
4	教室で子どもが動きまわる運動量、活発さ
5	子どもの表情の豊かさ
6	ひとみしりや慣れにくさの程度や回数
7	ぐずったり、泣いたり、子どものききわけのなさ
8	家で、子どもが動きまわる運動量、活発さ
9	家で、子どもがおもちゃや遊具で遊ぶ時間
10	家での、おとうさんと子どもとの関わりの量
11	おかあさんから、子どもに話しかける量や回数
12	お子さんをしかる回数
13	子どもに対してイライラすること
14	子どもを連れて外出する機会
15	おかあさんなかと、子育てについて話しをする機会
16	ご夫婦で、子どもについて話しをする機会
17	おかあさんの心のゆとり
18	親としての自信
19	子どもの発達についての不安
20	子どものしつけや子育てに関する不安、心配
21	子どもがかわいいという気持ち

Table 3 教室参加によって生じた変化の要因 質問項目

	項目
1	保育士や保健師、栄養士から、子育ての情報や専門知識の話しを聞いたこと
2	保育士からのワンポイントアドバイス、育て方など気軽に教えてもらったこと
3	年齢にあった子どもの遊びやテンポなど発達のようすについて、感じとれたこと
4	子どもが遊ぶ環境が整っていたこと(広々とした場所、おもちゃなど)
5	よそのお子さんや、おかあさんと知り合いになれたこと
6	子どもに、よそのお子さんと遊ぶ時間ができたこと
7	ほかのおかあさんの話しが聞けたこと
8	ほかのお子さんのようすが見れたこと
9	自分自身のことや、自分の子育てについて話しを聴いてもらったこと
10	個別相談

Ⅲ 結果

1. 子育て支援教室参加後の子どもと家族の変化

(1) 子育て支援教室全体の傾向

(a) 子育て支援教室参加後に『増えた』変化
変化の中で『増えた』という回答が6割以上あった項目は以下の通りであった。

「お友達に近づいたり、話しかけたり、関わっていきこうとする回数」	77.7%
「教室で子どもが動きまわる運動量、活発さ」	71.4%
「子どもの表情の豊かさ」	71.4%
「おかあさんかまと、子育てについて話しをする機会」	69.8%
「子どもがおかあさんに話しかけるおしゃべりの量」	68.2%
「教室で、子どもがおかあさんから離れている時間」	68.2%
「子どもがかわいいという気持ち」	64.6%
「おかあさんから、子どもに話しかける量や回数」	63.5%
「子どもを連れて外出する機会」	60.4%
「ご夫婦で、子どもについて話しをする機会」	60.3%

『増えた』という変化の上位項目は、子どもの変化に関するものが多く、母親たちは教室参加による子どもの変化を捉えていることがわかった。およそ7割の母親は、わが子が母親である自分から離れ、他者との関わりを持とうとし、活発に、表情豊かになり、母親へのおしゃべりの量も増えたと感じていた。また、母親自身の変化としては、約7割の母親がお母さん仲間と子育てについて話す機会が増えたと回答している。そのほか6割の母親は、子どもをかわいいと思う気持ちや、子どもに話しかける量、外出する機会も増えたと回答し、教室参加にともない母親から子どもへの働きかけが活発にな

っていることがうかがえた。さらに6割の母親は夫婦で子どもについて話をする機会が増えたと回答している。

(b) 子育て支援教室参加後に「これまでと比べものにならないほど増えた」変化

『増えた』項目のなかでも「これまでと比べものにならないほど増えた」の回答率が高かった項目は以下の通りであった。

「子どもがかわいいという気持ち」	19.4%
「教室で、子どもがおかあさんから離れている時間」	9.5%
「教室で子どもが動きまわる運動量、活発さ」	9.5%

教室参加によって「子どもがかわいいという気持ち」が『増えた』と回答した母親は先にも述べたとおり65%に上るが、その中でも約20%の母親が、これまでと比べものにならないほど増えたと回答していた。

(c) 子育て支援教室参加後に『減った』変化
変化の中で『減った』という回答が多かった項目は以下の通りであった。

「子どもの発達についての不安」	50.8%
「子どものしつけや子育てに関する不安、心配」	50.8%
「子どものひとみしりや慣れにくさの程度や回数」	44.4%
「子どもに対してイライラすること」	35.4%

教室参加により、約50%の母親が子どもの発達や子育ての不安が減り、約35%の母親がイライラすることも減ったと回答している。また、子どもの人見知りや慣れにくさが減ったと回答している母親も約45%いた。

(d) 子育て支援教室参加後も『変化なし』の項目

『変化なし』の回答率が高かった項目は以下の通りである。

「家での、おとうさんと子どもとの関わりの量」	60.3%
「ぐずったり、泣いたり、子どものききわけのなさ」	57.1%
「お子さんをしかる回数」	52.4%
「子どもに対してイライラすること」	48.4%

約6割の母親が、家庭での父子の関わりの量は変化がなかったと回答していることより、教室参加の効果が家での父子関係の変化にまではなかなか及ばないことが示された。しかしながら、逆の視点から見れば、約40%もの親子は教室参加によって家庭での父子の関わりが増えたと回答しており、教室参加の効果が家庭における父子関係に何らかの影響を及ぼしていることが示唆された。

次に、子どもの聞きわけのなさ、叱る回数、子どもに対してイライラすることなどは『増えた』という比率も高く、『変化なし』とあわせるとかなりの割合の親が、教室参加によって、子どものやりにくさに関する肯定的変化は見られなかったと回答していた。これらは教室参加によって2歳児の子どもの自我が発達し、活動性も高まり、おとなから見たやりにくさが増した結果とも推察できる。そのためこれらを短絡的に教室参加に効果がないと結論づけるべきではないと考えられる。

(2) コアラ・こぐま教室別の傾向

まず、信頼性分析として項目の信頼性係数(クロンバック α 係数)を算出した結果、 $\alpha = .799$ であった。このことより、信頼性は一定の水準を保っていることが、内的整合性の観点から明らかにされた。

次に、コアラ教室とこぐま教室の違いについて

検討するために、回答に有意な差が認められるかどうかを検定したところ、いずれの項目においても差は認められなかった。(マン・ホイットニーU検定、 χ^2 検定。ともにN.S.)

変化の有無を3件法で見た結果において、両教室間の回答率の差が10%を越える項目は以下の通りであった。

<コアラ教室の方が変化が大きい項目>

おかあさんの心のゆとり-『増えた』(コアラ57.9%、こぐま44.0%)

子どものしつけや子育てに関する不安、心配

-『減った』(コアラ55.3%、こぐま44.0%)

家で、子どもが動きまわる運動量、活発さ-

『増えた』(コアラ57.8%、こぐま44.0%)

<こぐま教室の方が変化が大きい項目>

子どもを連れて外出する機会-『増えた』

(こぐま68.0%、コアラ55.2%)

おかあさん仲間と子育てについて話をする機会-『増えた』

(こぐま76.0%、コアラ65.8%)

ご夫婦で、子どもについて話をする機会-『増えた』(こぐま68.0%、コアラ55.3%)

教室で子どもが動きまわる運動量、活発さ-『減った』(こぐま12.0%、コアラ0%)

コアラ教室の母親は、こぐま教室の母親と比べ、心のゆとりや子どものしつけや子育てに関する不安・心配といった母親自身の内面に関する変化をあげるものが多かった。また、子どもに関しては、家で動き回る運動量や活発さが増えたと回答している母親が多かった。

こぐま教室の母親は、コアラ教室の母親と比べお母さん仲間や夫婦で話をする機会が増えた、子連れで外出をする機会が増えたと回答しているものが多かった。また、子どもに関しては、教室で動き回る運動量や活発さが減ったと回答している母親が多かった。

2. 子育て支援教室参加によって生じた変化の要因

(1) 子育て教室全体の傾向

変化の要因の中で『影響があった』という回答が9割以上あった項目は以下の通りであった。

「よそのお子さんや、おかあさんと知り合いになれたこと」	96.7%
「ほかのおかあさんの話が聞けたこと」	93.5%
「年齢にあった子どもの遊びやテンポなど発達の様子について、感じとれたこと」	93.6%
「子どもが遊ぶ環境が整っていたこと（広々とした場所、おもちゃなど）」	91.9%
「保育士や保健師、栄養士から、子育ての情報や専門知識の話を聞いたこと」	91.8%

ほとんどの母親が、他の子どもの様子を見れたことや、他の母親と知り合いになれたり、話が聞けたことを変化の要因であると回答していた。同様に、年齢にあった子どもの遊びやテンポなど発達の様子について感じ取れたことをあげる母親も多く、教室に参加するまで母親たちが自分以外の子育てについて触れる機会がいかに少ない現状にあり、教室参加によって遊び方など子育てに関する経験が増えたことを、変化の要因としてあげていることがわかった。また9割の母親が、広々とした場所やおもちゃなど子どもが遊ぶ環境が整っていたことや、保育士や保健師、栄養士から子育て情報や専門知識の話が聞けたことをあげていた。

(2) コアラ・こぐま教室別の傾向

まず、信頼性分析として項目の信頼性係数(クロンバック α 係数)を算出した結果、 $\alpha = .886$ であった。このことより、信頼性は一定の水準を保っていることが、内的整合性の観点

から明らかにされた。

次に、コアラ教室とこぐま教室の違いについて検討するために、回答に有意な差が認められるかどうかを検定したところ、以下の項目においてコアラ教室の母親のほうが、こぐま教室の母親よりも影響度が高いことが認められた(マン・ホイットニーU検定)。

「個別相談」(こぐま影響あり 45.5%、コアラ影響あり 81.1%、 $p < .001$)
「保育士や保健師、栄養士から、子育ての情報や専門知識の話を聞いたこと」(こぐま影響あり 84.0%、コアラ影響あり 97.3%、 $p < .01$)
「保育士からのワンポイントアドバイス、育て方など気軽に教えてもらったこと」(こぐま影響あり 84.0%、コアラ影響あり 94.6%、 $p < .01$)
「自分自身のことや、自分の子育てについて話を聴いてもらえたこと」(こぐま影響あり 76.0%、コアラ影響あり 89.1%、 $p < .10$)

この結果から、コアラ教室の母親は、こぐま教室の母親に比べ、専門家による個別相談を受けたことや、専門家から子育ての情報や専門知識の話を聞いたこと、保育士から簡単なアドバイスを受けたこと、自分自身のことや自分の子育てについて話を聞いてもらえたことなどが、子どもや家族の変化に影響を与えていると捉えていることが明らかになった。つまり、コアラ教室の親は、他の母親と知り合いになったり、他の母親から受ける影響よりも、専門家からのアドバイスや相談のほうが影響力が強かったということがうかがわれた。

IV 考察

1. 子育て支援教室参加による変化

(1) 参加者である母親は、子育て支援教室に参加して、全体に好ましい何らかの変化、つまり

効果があったことを認めていることが示唆された。これは、行動分析を通じて同様に取り組まれた亀島（亀島・谷向・蕨岡・牛尾・沼田，2005年 印刷中）らの研究と共通した結果を提示しており、子育てにおける母親からの変化の報告と育児支援プログラム場面での親と子どもの具体的な行動が一貫していることを示すことになった。子育て支援プログラム参加の効果が、親自身にも認知され、牧野（1983）の言うような、子育て以外の場面で具体的なポジティブな行動、例えば、子どもへの身体接触やにこやか度としてあらわれて「良い子育て」への道を準備したように思われた。

(2) 子育て支援教室参加による変化は、子どもの行動、母親自身の行動と内面、夫婦関係、母子や父子の関係にまで及んでいる。

2歳児の子どもの変化の特徴としては、他児への関わりが活性化し、活動性や表情の豊かさ、発語、母から分離している時間が増加したという回答が多かった。

母親自身の変化としては、お母さん仲間と話しをする機会、子どもがかわいいという気持ち、子どもに話しかける量のほか、子連れで外出する機会や夫婦で子どもについて話しをする機会が増えたことをあげる母親が6割以上いた。とりわけ子どもがかわいいという気持ち、「これまでと比べものにならないほど増えた」と回答した母親はおよそ20%にのぼり、子育て支援教室への参加が、母親の子どもに対する愛情まで活性化する効果があることが示唆された。

また、子どもの発達やしつけ、子育ての不安は約5割の母親が減ったと回答していた。加えて、子どもの人見知りの程度も約4割の母親が減ったと回答していた。

さらに家庭での父子の関わり量は、6割の母親が「変化なし」と答えているものの、およそ4割の母親は『増えた』と回答し、教室参加の影響がある家庭も少なくないことがうかがえた。

(3) 教室参加による変化の要因

教室参加による変化の要因として、およそ95%の母親がほかの家庭の母親や子どもと知り合いになれたことや、ほかの母親の話しが聞けたり子どもの様子が見れたこと、をあげていた。同様に、年齢にあった子どもの遊びやテンポなど発達の様子について感じとれたことをあげる母親も多く、教室に参加するまで母親たちが自分以外の子育てについて触れる機会がいかに少ない現状にあり、教室参加によって遊び方など子育てに関する経験が増えたことを、変化の要因としてあげていることがわかった。また、広々とした場所、おもちゃなど子どもが遊ぶ環境が整っていたことや、保育士や保健師、栄養士ら専門家から、子育ての情報や専門的な話しを聞いたことも、変化の要因として90%以上の母親があげていた。

2. コアラ教室とこぐま教室の違いについて

要支援児のうちフォローアップケースを過半数含むコアラ教室と、一般公募の抽選で参加者を決定したこぐま教室を比較すると、教室参加による変化やその影響要因、また、サポートや今後のニーズも異なる傾向にあることが示唆された。

(1) 教室参加による変化

コアラ教室の方が変化の大きい項目は、おかあさんの心のゆとりが『増えた』、子どものしつけや子育てに関する不安、心配が『減った』、家で子どもが動きまわる運動量、活発さが『増えた』というものであった。

一方、こぐま教室の方が変化が大きい項目は、子どもを連れて外出する機会が『増えた』、おかあさん仲間と子育てについて話しをする機会が『増えた』、夫婦で子どもの話しをする機会が『増えた』、教室で子どもが動きまわる運動量、活発さが『減った』、であった。

コアラ教室の母親は、こぐま教室の母親と比べ、心のゆとりや子どものしつけや子育てに関する不安・心配といった母親自身の内面に関す

る変化をあげるものが多かった。また、子どもに関しては、家で動き回る運動量や活発さが増えたと回答している母親が多かった。

こぐま教室の母親はコアラ教室の母親と比べ、お母さん仲間や夫婦で話しをする機会が増えた、子連れで外出する機会が増えたと回答しているものが多かった。また、子どもに関しては、教室で動き回る運動量や活発さが減ったと回答している母親が多かった。

(2) 教室参加による変化の要因

コアラ・こぐま教室間に影響度に有意差があるかをみたところ、「個別相談」、「保育士や保健師、栄養士から、子育ての情報や専門知識の話しを聞いたこと」、「保育士からのワンポイントアドバイス、育て方など気軽に教えてもらったこと」、「自分自身のことや、自分の子育てについて話しを聞いてもらったこと」の項目で、コアラ教室の母親の方が、こぐま教室の母親よりも影響が大きいと回答する傾向があることが明らかにされた。

この結果から、コアラ教室の母親は、こぐま教室の母親に比べ、専門家による個別相談を受けたことや、専門家から子育ての情報や専門知識の話しを聞いたこと、保育士から簡単なアドバイスを受けたこと、自分自身のことや自分の子育てについて話を聞いてもらったことなどが、子どもや家族の変化に影響を与えていると捉えていることが明らかになった。つまり、コアラ教室の親は、他の母親と知り合いになることや、他の母親から受ける影響よりも、専門家からのアドバイスや相談の方が、影響力が強いということがうかがえた。

3. まとめ

子育て支援教室参加による変化は、母親からの報告に見受けられるのと同様、具体的な親と子どもの行動にあらわれるようである。今回の子育て支援プログラムを経験した母親の変化は、牧野(1983)が述べる「良い子育て」に向けての親子の交流行動とともに、母親自身の内

面、夫婦関係にも影響することが報告された。事実、今回プログラムに参加した子どもの具体的な行動を分析した亀島(亀島・谷向・蕨岡・牛尾・沼田, 2005年印刷中)らの研究からも、これらの子どもの活動性、表情の豊かさ、発語が増加したと報告している。

さらに、子育て支援教室参加から得られたと報告されたもう一つの重要な点は、参加するまで自分以外の子育てについて触れる機会が少なかった母親が、教室参加によって遊び方など子育てに関する経験が増えたことと、保育士、保健師、栄養士ら専門家からの、子育て情報や専門的な話しを聞いたことがあげられる。まさに、落合(1980)のいう情報的子育て支援や情緒的子育て支援要因である。付け加えて、要支援児の母親と普通児の母親の比較結果からは、特に要支援児の母親は、専門家による個別相談や子育て情報・専門知識などのアドバイスこそが、子どもや家族の変化に影響を与えていると捉えていた。したがって、今回の研究結果からは、子育て支援プログラムに参加してくる母親に対しては、他の母親たちとの交流や経験の大切さに加えて、専門家からのアドバイスや相談が強く影響することが明らかにされた。今後の子育て支援プログラムの洗練には、専門家からのアドバイスや相談という点が、不可欠になる要因であるようである。

付記

本研究は平成16年度こども未来財団児童関連サービス調査研究等事業(主任研究者:谷向みつえ助教授)の助成を受けて行われた、一連の研究の一部である。

研究プロジェクトに参加する貴重な機会を与えてくださりました。関西福祉科学大学社会福祉学部助教授 谷向みつえ先生に厚く御礼申し上げます。

引用文献

岩立京子・高橋千草・河野真紀 2002 子育て支援活動の効果に関する研究～虐待的行為が目立つ母親とその子どもへの支援を通して～ 日本

- 発達心理学会第13回大会発表論文集, 107.
- 亀島信也・谷向みつえ・蕨岡幸一・牛尾友香・沼田 宙 2005 (印刷中) 子育て支援プログラムの介入は母親の行動を変えるか? 関西福祉科学大学心理・教育相談センター紀要, 3, 44-54.
- 小谷正登・生駒幸子・小谷牧子 2005 乳幼児を持つ養育者に対する子育て支援の効果(2) 日本発達心理学会第16回大会発表論文集, 553.
- 牧野カツコ 1983 若い母親の育児不安と生活とのかかわり 家庭科教育, 57(10), 27-31.
- 宮本邦雄 2005 地域の子育て支援サービスの既知度と利用度 日本発達心理学会第16回大会発表論文集, 547.
- 落合恵美 1989 育児援助と育児ネットワーク 家族研究, 1, 109-133.
- 尾崎康子 2004 子育て支援による母親の心理的变化—母親を主体にした援助の検証— 日本発達心理学会第15回大会発表論文集, 107.
- 手島聖子 2001 養育者の育児ストレスと育児支援システム—乳幼児健康診査を通じた子育て支援と児童虐待の予防について 研究助成論文集(安田生命社会事業団), 37, 30-38.
- 都留民子 1990 家族の子育てを支えるシステム ころの発達, 30, 72-78.